

田中孝信・要田圭治・原田範行（編著）  
『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』  
東京：彩流社、2016、4200 円、390 頁＋ 22 頁

桐山恵子

高邁な理想を掲げて努力しても、必ずしもそれが実現できるとは限らない。不満な点は残るが、現状、これぐらいで良しとしておこう。おそらくこれが、凡人が通常抱く人生観だろう。凡人という聞こえが悪いが、人生、何事も程々に事を進めた方が、波風立わず穏やかな日々を送れるという点では肯定的な面もあるはずだ。

しかし多くのヴィクトリア朝の人々は、程々という言葉とは縁遠く、皆で捧げもつリスpekタビリティという旗のもと、人生におけるその完璧な遂行を目指した。そして人間の生にとって根源的な要素であるセクシュアリティにおいても、表向きは完璧なリスpekタビリティを追い求めた。その結果、一夫一婦制に基づくセクシュアリティを「正常」とみなし、それ以外を「倒錯」としたのである。序章で田中孝信氏が指摘するように、一つのセクシュアリティがそれ以外の多くのセクシュアリティを生み出したのだ。本書はセクシュアリティの多様な表現や表象の分析により、人間と社会の実相に迫ることを目的としている。あとがきで原田範行氏が述べるように、個体の生物的身体的特質を反映するセクシュアリティが、個体間で結ばれる諸種の関係性や社会にも関わっていることを考慮すると、すでに多くのことが言われてきたヴィクトリア朝のセクシュアリティに関しても、新たな発見が認められるはずだ。以下、各章ごとの概要を述べるが、内容に関連性が見られる章は、連続して言及した方が有意義と思われるため、章立ての順番には従わない。

田中氏が序章で解説するように、18 世紀に入ると、権力は労働力の確保の点から「人口」を政策的な課題とせざるを得なくなり、必然的に出生率すなわち性の問題が重要となってきた。要田圭治氏の「マルサス以降——性は個人と人口をつなぐ」で言及されるマルサスは、事実 18 世紀末に人口という数量的な概念に着目する。彼は、人間の理性に鑑みても、男女間の情熱は現状のまま持続していくため、生殖の力が食糧増産の力を凌ぎ、最終的に人間は不幸に陥ると考える悲観論者だった。しかしマルサスの後に現れた思策家兼実践者である 3 人の医師達は、概して、理性への信頼に基づく楽観的な人間観をもっていた。

たとえば、教育は中間層にのみ有効であると考えていたマルサスに対して、マンチェスターの労働者を調査したケイは、性的なモラルを改善するために教育を重視し、教員養成学校を設立した。そしてギャヴィンは、家族が、性別や年齢を無視した状態で同じベッドに寝るような住環境の問題点を、私生児の統計を用いて指摘し、居住形態の改善を求めた。統計に関心をもちながらも、モラルの退廃を正確な数で表すことはできないと述べていたケイに対して、ギャヴィンは、私生児の数を統計処理することにより、性現象を量的に把握したのである。またスミスは、マルサスを批判した著作で、理性と欲望を対置し前者の優越を宣言した。そして、人間が不幸に陥るならば、それは人口増加ではなく社会の諸制度が原因であると主張した。彼ら3人に共通して見出せるのは、啓蒙の光に対する信頼と同時に、対象を観察し分析する意志だったのである。

ギャヴィンと同様に、統計を用いて記事の信憑性を高め、ジャーナリストとしての成長を示すのが、閑田朋子氏の『『不適切な』議題と急進派女性ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤード——1847年スプーナー法案（誘惑・売春取引抑制法案）の行方』で取りあげられるミーティヤードである。この法案の発端は、1843年に女性保護法改善・施行協会がエクセター主教フィルポッツに働きかけ、上院に法案を提出することから始まるが、却下。次に協会が目をつけたのが下院議員スプーナーであり、法案の通称は彼の名によっている。しかしまたもや成立には至らず1846年度会期は終了。その約1か月半後に、ミーティヤードは「女性の保護」を新聞に掲載し、「不適切な」議題とされた法案の手ぬるい内容を批判した。たとえば財力のある男性に対しては、金銭的な償いではなく労働で罰を与えるべきだと主張している。また男性を批判する一方で、「女性の最善の救い手は女性である」と強調し、女性同士の連帯を訴えた。

「女性の保護」に続いて彼女が執筆した「スプーナー議員の法案についても申す」は、攻撃的な面が目立った以前の記事と比べると、権威筋の意見や統計を用いることにより論の説得力を増す工夫がなされていた。しかし再度、法案は否決される。その原因のひとつは、法案名の「誘惑」の語が、女性を性的に貶める男性の責任を問うていたからである。男性に甘く女性に厳しい性のダブル・スタンダードが当然だった時代に、この法案は急進的に過ぎたのである。

スプーナー法案が否決されてから、およそ40年後の1885年に性交渉の年齢を13歳から16歳へと引き上げる刑法改正法の成立に貢献したのが、市川千恵子氏の「欲望の封印から充足の模索へ——エリス・ホプキンズとヴィクトリア朝中期の性

の葛藤」で論じられるホブキンズである。その住環境から、性的に早熟とされ誘惑の対象となりやすかった労働者階級の少女を救うためにも、男性の性的清潔さの啓蒙につとめた。また自己と労働者階級女性との差異を埋めるべく、彼女らに「わたくしの姉妹」と語りかけ、社会を大きな家族として解釈することにより、女性の活動領域を拡大させた。ミーティヤードと同様に、ホブキンズも女性同士の連帯を訴えたが、さらに両者とも作家としても活躍していた。一見シンデレラ・ストーリー（ミーティヤードの「新バーリー卿」）やユートピア的な結末（ホブキンズの『ローズ・タークランド』）を描いているように見える作品にも、議会への皮肉あるいは性差に基づく抑圧的構造を攪乱しようとする欲望が隠されている。

またホブキンズは医師ヒントンの利他主義に感銘し、彼の伝記を著した。ところが彼女による伝記とイーディス・エリスの伝記を比べると、ホブキンズが、ヒントンの買春問題の解決策として提示した一夫多妻制には触れず、彼を聖人化してしまっていることが判明する。ヒントンの思想の特徴のひとつとして、欲望の抑制や規範への隷従よりも、情熱の発露を称揚したことがあるが、ホブキンズはそのようなヒントンの側面をそぎ落としてしまったのである。

ホブキンズが成立に貢献した刑法改正法に、同じく大きく関わったステッドに焦点をあてたのが川端康雄氏の『『現代バビロンの乙女御供』——ウィリアム・T・ステッドの少女売春撲滅キャンペーン』である。ステッドは少女売春についての連載記事を『ペル・メル・ガゼット』に掲載し、法案の成立を促した。執筆にあたり、彼は売春宿に入れられた少女から直接話を聞いたり、客を装って宿に潜入したり、時には取材内容を脚色して記事をセンセーショナルな内容に仕立てた。このようなステッドの記事は、当時、民衆的な読み物として普及していたメロドラマの内容と似通っている。上流階級の不埒な男が労働者階級の娘を籠絡しようとする、階級的な搾取の物語は、メロドラマの定番のひとつだった。しかしステッドは、メロドラマを思わせるような記事に、高尚な文学からの引用も用いていた。ギリシャ神話で乙女を餌食とするミノタウロスのエピソードを導入部分で使用したり、ミルトンの詩劇『コーマス』の一節を引用したりしている。

連載から約1か月後に、刑法改正法は可決に至る。法案がステッド法とも呼ばれることになったゆえんである。法案成立のあと、ステッド自身は、反ステッド陣営の意趣返しのために、取材で関わった少女に対する誘拐と売春斡旋で有罪となり収監される。しかし彼は、タイタニック号の事故で命を落とすまで、有罪を汚点ではなく名誉と考え、毎年、収監された日には囚人服を着用していた。

誇らしげに囚人服を着用したステッドに対して、それを身にまとったことにより時代の寵児の地位から転落したのが、原田氏の「ジャーナリズムとセクシュアリティの世紀末——オスカー・ワイルドの自己成型」のワイルドである。唯美主義者ワイルドを考えると、大衆的なジャーナリズムとは相反するようだが、饒舌さを売りに読者を憤慨させることで自身を売り込んだ彼は、ジャーナリズムに積極的だった。また論じる対象となる美を「別個の様式もしくはあらたな素材」に移しかえようとする、批評家ワイルドにとって、それを実行するのに適した場がジャーナリズムだった。

彼自身のセクシュアリティを表明した喜劇『まじめが肝心』にも、ジャーナリズムとのつながりが見られる。たとえば婚約の記事が、「地方紙」か「モーニング・ポスト」のどちらに掲載されるかで見栄を張るセシリーとグウェンドレンの例や、三文小説執筆に夢中になるプリズムの例などが挙げられる。大衆的な俗物を批判する登場人物達が、すでにその俗物性を内包してしまっているのである。また劇中でくり返される「アーネスト」は、同性愛を墮落とする言論で頻繁に使用される語彙だった。「まじめが肝心」という表現には、上流階級の「まじめ」をジャーナリズムの俗物性とともて笑い飛ばしつつ、自身が「アーネストである」ことの表明も込められていた。ワイルドはのちに男性同士の「重大猥雑行為」に及んだ罪で逮捕監禁される。ステッド記事のおかげで成立した刑法改正法には、男性同性愛を禁じる条文が加えられていたからだ。川端氏が指摘するように、この法案は、少女保護の体制改善をもたらすと同時に、国家による性の管理を強めた。自身も『ペル・メル・ガゼット』の執筆者だったワイルドにとっては皮肉な結果となった。

ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』には、主人公が阿片窟を訪れる場面が描かれているが、英国の中・上流階級からなる中心世界にとって、阿片は犯罪や墮落と結びつく中国人像確立の要因のひとつだった。しかし田中氏の「イースト・エンドと中国人移民——世紀転換期のスラム小説にみる異人種混淆」では、中国人社会という「異質なもの」に対して、中心世界が放つ眼差しは一面的ではなく重層的だったことが明かされる。たとえばハークネスの『ローブ大尉』では、異人種混淆のセクシュアリティが語られ、ユートピア的イースト・エンド像が喚起される。一方、中国人居住区への嫌悪感を表したのが『エドウィン・ドルードの謎』で「悪の宮殿としての阿片窟」を描いたディケンズだ。阿片吸引で干からびてしまう作中人物パッファー王妃のように、イギリス人女性の中国人化は、阿片と中国人を扱う書物の常套手段となっていた。ローマの『麻薬——チャイナタウンと麻薬取引の物語』

では、中国人男性の阿片による陰謀のため、白人少女が犠牲になる構図が用いられている。

しかしトマス・バークの短編集『ライムハウスの夜』は、紋切り型の中国人像に則りながらも、その正当性に修正を迫り、悪の巣窟というチャイナタウン観を転倒させる。さらに独立心旺盛なヒロインとして少女達が肯定的に描かれており、イースト・エンドの女性を恐ろしい別種の生き物として捉える、ジョージ・ギッシングやアーサー・モリソンのスラム小説とは一線を画する。またギッシングやモリソンが下層階級への共感をもたないのに対して、ヘンリー・W・ネヴィンソンは、短編集のタイトル『私たちの隣人たち』が示唆するように、労働者への同情を示している。この点で、バークのイースト・エンドへの眼差しはネヴィンソンの伝統によっている。バークは、中心世界の間人同様、中国人にも様々な性質の者が存在し、「異質なもの」は自分たちと変わらない存在であることを読者に気づかせる。

佐美真理氏の「『模倣』する『身体』——『アグネス・グレイ』における動物・身体・欲望の表象」は、ガヴァネスとしてのアグネスの「身体」を、動物への接し方から考察した論である。たとえばアグネスの生徒であるトムが小鳥を痛めつけようとした際に、アグネスが、トムより先に石を落として小鳥をつぶすという場面に着目し、彼女がトムの暴力的な行為を「模倣」し、「力」の「記号」としての振る舞いを自身に取りこんだと指摘する。「大きな平たい石」を持つことにより、自身の野蛮な「肉体」をさらしたアグネスの「身体」は、ガヴァネスの危険な「身体」として特定化され、彼女は職を解雇される。

アグネスの「身体」はガヴァネスのそれにしては、比較的自由に行動的だが、彼女の「身体」は単なる「肉体」へと還元される危険を秘めており、そこには対象や意味の定まらない「欲望」が派生するという。そしてこの「欲望」の読解が、小説を面白く読むためのひとつの秘訣であると結論づける。

全体としての身体ではなく、その細部へのフェティシユ的なこだわりの分析により、ロレンス作品の多層的なセクシュアリティを明らかにするのが、武藤浩史氏の「D. H. ロレンス『息子と恋人』のセクシュアリティと（ポスト）ヴィクトリア朝」である。『侵犯者』で描写されるヘレナの腕の爛れは、彼女のファム・ファタールの要素や恋人の自殺などと相まって、退化言説とのつながりを示唆しており、フェティシズムが否定的に描かれている。しかし『息子と恋人』では、クララの腕に惹かれるポールに性的充足が与えられることにより、退化ではなく再生が描かれており、フェティシズムが健全な性の一部となっている。また『侵犯者』では、口唇

愛は性的結合に達することなく、不毛の象徴として描かれる。対して『息子と恋人』では、否定的な含みをもつ口唇愛も描かれはするが、ポールによるクララの喉元へのドラキュラ的な接吻が、性交へと結びつくように、接吻に肯定的な意味合いがもたらされている。

また小説タイトル *Sons and Lovers* の翻訳に関して、様々な案が出されているが、そもそも非限定的な複数性を強調するタイトルが、作品の多層的なセクシュアリティを示している。母子間の愛だけではなく、父の息子への愛、あるいはモレル夫人の夫婦喧嘩の原因が、夫と親友とのホモエロティックな関係に起因するように、同性愛も描かれている。すなわちロレンス作品のセクシュアリティとは、性器中心主義に集約されるような狭義の性ではない。人の生の全体性の中で性を考察したロレンスは、セクシュアリティの偉大な思索家であった。

本田蘭子氏の「髪と鏡——メドゥーサとしてのバーサとそのセクシュアリティ」は、『ジェイン・エア』のバーサの肉体に根差した感情を、3つのモチーフ——髪、鏡、まなざし——に基づき、ベルセウス神話のメドゥーサとの類似性を考慮に入れて探った論である。

バーサのアイデンティティともいえる彼女の顔が、火事の際に、たなびく黒髪で隠されてしまうのは、彼女が人間と獣との間に位置する両義的な存在であることを示している。さらに、結婚式でバーサの存在を暴露されたロチェスターの顔が「色のない岩」のようだった点で、バーサは彼を石化しており、メドゥーサとの類似が認められる。またバーサとジェインの初対面は鏡を介して行われており、バーン＝ジョーンズの絵画に見られるような、水鏡に映ったメドゥーサとアンドロメダのそれと結びつく。このように、バーサの悲劇をメドゥーサを通してみる時、その痛みや切なさがより普遍的に立ち現われてくと結んでいる。

該博な知識や作品の詳細な読みに基づき、丁寧かつ刺激的な論旨が展開される章が多く、食傷気味になりがちなヴィクトリア朝のセクシュアリティに対して、新鮮な関心を呼び起こすのに充分な一冊だった。詳細に触れる余裕がなかったが、本著で取りあげられた人物の様々な活動の基盤には、篤い信仰心があったと思われる人が多く、イースト・エンドの慈善事業などを考察する際には、宗教との関連にも目配せする必要があるのではないかと考えさせられた。また幾人かの執筆者の方が指摘されているように、どれほど労働者階級への共感をもって彼らの居住区へおもむき、彼らの性的なモラル改善に真摯に尽くしたとしても、その行為から、権力の行使による偽善的な側面を完全に拭い去ることは出来ないだろう。しかしだからとい

って、何もせずに手をこまねいているのと、余計なお世話だと疎まれつつも、何らかの手を差し伸べようとするのには大きな違いがある。ヴィクトリア朝のセクシュアリティを思考することは、さらに混沌とした現代を生きる私達のセクシュアリティを、完璧とはいかずとも、程々の好ましい段階へと導いてくれる、有益な道しるべとなるに違いない。

(和歌山大学准教授)